

## 平成25年度第3回墨田区図書館運営協議会会議録

1 日時 平成26年3月17日(月曜日)

午後7時～8時30分

2 場所 墨田区立ひきふね図書館 会議室

3 出席者

会 長	永田 治樹	(筑波大学名誉教授)
副 会 長	河西 由美子	(玉川大学准教授)
委 員	金子 キク子	(図書館ボランティア「くさぶえ」)
委 員	永井 敬子	(図書館ボランティア「おはなしポット」)
委 員	小田垣 宏和	(ひきふね図書館パートナーズ)
委 員	小野内 常子	(ひきふね図書館パートナーズ)
委 員	小柳 裕基	(公募区民委員)

欠席者 五十嵐 光春(墨田区立小梅小学校長)

西村 均(墨田区立豎川中学校長)

荘司 美幸(公募区民委員)

4 議事

(1) 墨田区立図書館の基本理念について

(2) 雑誌スポンサー制度について

(3) 資料収集方針について

(4) その他

5 会議録

議事第1

墨田区立図書館の基本理念について

永田会長 事務局に説明をお願いしたい。

(資料1のとおりひきふね図書館長が説明する)

永田会長 公共図書館は、何でもすると言ってしまふ結果、何もできないということがよくある。基本理念で「誰でも」、「あらゆる活動」という文言が入っているが、「あらゆる活動」は入れないほうがいいと思う。

小柳委員 具体的な取り組みというところにいろいろと書かれているかと思うが、企業人として数字で表すというのが一般的である。例えば、収集・保存の基準につい

て具体的な基準を持っていて初めてこのように書ける。図書館サイドでもう一度検討したほうがいい。あと、オンラインデータベースの提供も、誰にどのように提供すると考えているのか。実際に運用するならば、そこまで考えていなければならない。図書館システムの機能の充実もどこまで目標があるのか。目標があって、その上に計画があって、1年間運用して検証して、来年度また計画を立てるというPDCAサイクルを実施していかなければいけないと思う。ここに書く分にはこれでよいが、このようなものをバックヤードに持ったうえで実施にうつればよいと思う。

小田垣委員 「多様な文化に対応」というのは具体的にはどのように考えているか。

村田館長 外国人の方が図書館を利用されることもあるので、外国語表記の案内とか、外国語の本を入れるなど、外国人が図書館に来て違和感なく自然に利用できるといったことである。

河西委員 そうすると、「図書館利用に障害がある方へのサービス」というのは、どちらかという障害者サービスに特化しているのか。言語とかも障害に入るが、その辺の境界がわかりづらい。

永田会長 オンラインデータベースの提供とあるが、これを見出しに出すのはやや古い感じがする。デジタル情報も多種多様な資料である。ここであえて言う必要はないのではないか。

河西委員 これを活用してもらうには利用教育をしなくてはならない。

永田会長 そうなるとデジタルデバイドの問題も絡んでくる。

金子委員 図書館利用に障害がある方へのサービスについては、私どもの「くさぶえ」が音訳、点訳を行っている。高齢者も含めて読むことができない、ページをめくることができないなど、様々な障害があるが、その中でも視覚障害の割合が大きく、今までいろいろな対策を行ってきた。そういうものをしっかりと入れていただきたい。

村田館長 デイジー図書や点字図書等、利用しやすい環境をどう作っていくかは考えている。しかし、ほかにもデジタルデバイドとかいうようなこともあるので、その辺も加えたいと思う。

永田会長 障害にもいろいろある。図書館はどうしても視覚障害を第一に考えてしまう。

河西委員 図書館システムの機能拡充というものは書く必要があるか。

永田会長 それは書いておいたほうがよいと思う。他の先進国と比べると日本の図書館はこの分野でかなりレベルが低い。図書の情報を探すだけでなく、文化交流などの機能もシステムに入れられればよいと思う。

小柳委員 具体的な取組みの期間はどれくらいで考えているか。

村田館長 計画では具体的なスパンは定めていない。目指すべき方向性を定めるものとしている。今までこういうものは無かった。

小柳委員 それぞれにスパンを定めると、優先順位が決まってくると思う。そのことをここに書くかどうかは別として、そういう考えは持っておいたほうがいい。

永井委員 予算も関係してくるだろうし、難しい面もあると思う。

小柳委員 難しいかもしれないが、期間を設定して逆算していくと、達成しやすいと思う。

永田会長 図書館システムというところを、図書館サービスシステムとしたほうが、イメージが明確になると思う。今の図書館システムはほとんどが管理システムである。もっと利用者へのサービスを重視したシステムにして欲しい。

河西委員 ある自治体の図書館の計画では、半分くらいシステムのことが書いてある。しかし、そのシステムが利用者にとってどういう利益があるのかが見えてこない。利用者としては違和感がある。

小田垣委員 図書館は必ず無料でないとならないのか。有料サービスで付加価値をつけることはできないのか。

村田館長 図書館法で無料の原則がある。

永田会長 無料の原則というのは少し言いすぎで、無料のサービスはどこまでかというのが問題となっている。例えばオランダのように、閲覧は無料だが、貸出は有料としているところもある。

小田垣委員 先日、日比谷図書館でシンガポールを中心とした東南アジアの図書館事情の講演に行った。シンガポールでは、通常の貸出は無料だが、インターネットを使った予約貸出は年間にいくらかの料金がかかるというシステムのようなのである。対価を払って付加価値を上げていくということがこれからは必要かもしれない。旧態依然ではなく、画期的なイノベーションが必要だと思う。

永井委員 どのようにしたら本を読みたいと思ってもらうかを考えたら、今小田垣委員が言ったような姿勢も必要だと思う。

金子委員 2階のプロジェクトコーナーを拝見していたら、墨田区立図書館を使った調べる学習コンクールの作品が紹介されていて、初めて見たが、小学生が克明に調べて学習をしていた。それを見た児童に波及させていくということも大切である。

村田館長 この事業は今年で3年目になるが、今年は特にいい作品が多かった。個人でも賞をとっているが、墨田区教育委員会としての活動も評価され、墨田区教育委員会として活動賞をいただいた。指導室のアドバイザーの先生やボランティアの方に来ていただき、相談に来た子どもは延べ270人ほどに上った。今年はまだ早い時期から相談会を開催して、さらに力を入れてやっていきたいと思っている。

河西委員 私は数年前に審査員をやっていた。地域、組織の取り組みが重要である。こういうのは大変励みになる。

金子委員 ひきふね図書館の2階のプロジェクトコーナーでの展示も大きな励みになると思う。

永田会長 他人の目を通してみると、改善点やわかりづらい表現があったりする。今の意見を元にもう一度考えていただければと思う。

## 議事第2

雑誌スポンサー制度について

永田会長 事務局に説明をお願いしたい。

(ひきふね図書館長が説明する)

永田会長 スポンサーに応募する企業は、地場企業となるのか。

村田館長 墨田区をPRするという目的からも、そうなる。

永田会長 スポンサーとなる企業の基準などはあるのか。

村田館長 それは要綱で作っていくことになる。反社会的な企業等ははずすことになると思う。

永田会長 例えば反社会的な企業ではないとしても、それを公共がPRするにはなじまない企業もある。その辺の基準は決めておいたほうがいい。

河西委員 ほかの区の事例ではどうなっているのか。例えば、大手のチェーン店等では、当然その区にも店舗はあると思うが、どう扱っているか。

村田館長 そこまで大きな企業は入っていなかったと思う。

小柳委員 何もないところから中小企業にスポンサーになってくれと言っても、どういう感じかわからないので手を出しづらいと思う。本当は、墨田区を代表するような大企業がスポンサーとして入ると、あそこが参加しているのなら、という感じで中小企業にも広がっていくと思う。企業にもIRやCSR等の考えもある。そういう名目で、地域貢献をPRできるということを理解してもらえると、入口のハードルは下がるかもしれない。

永田会長 CSRの団体がある。そういうところに行けば話がしやすいかもしれない。

河西委員 商工会議所と話をするのもいいかもしれない。

村田館長 やはり地域貢献という視点のほうがいいという考えか。

小柳委員 そう思う。墨田区にも名の通った企業があると思うので、そういうところと話をしてみてもどうか。

金子委員 地場産業の密接さというのがある。

永田会長 この制度がうまく機能すれば、雑誌が充実する。図書館はまだ雑誌が少ないので、ぜひ充実をさせて欲しい。

## 議事第3

資料収集方針について

永田会長 事務局に説明をお願いしたい。

(ひきふね図書館長が説明する)

永田会長 抽象的にはいいことが書かれている。あとは具体的にどうしていくかという、色々な数字を把握して、それを前提に考えなければならないと思う。墨田区がどのあたりを目指していて、墨田区の特徴は何かというところが重要である。

永井委員 実際には、この選定基準を元に、何人かで委員会を作ってそこで決めているかと思う。その場合、個人的な基準が入ってくるので、いくら基準があってもあまり少ない人数で選ぶと偏りが出てきてしまうのではないか。

田中緑図書館長 収集方針を作って、その後に細かい選定を考える。最終的には利用者のニーズがメインになってくるが、中には利用は少ないかもしれないが図書館として揃えておくべき本もあるという考えで選んでいる。

河西委員 選定では蔵書の構成にまで踏み込んでいるのか。ある分野の本を重点的に増やしていくとか。

永田会長 一方では区民のニーズに忠実に選定をするということと、一方で図書館は貸本屋ではないという考えもあると思う。そのあたりをどう調整するかということである。

河西委員 リクエスト制度があると思うが、どれくらいの割合になるか。

井東次長 図書購入費が全体で5千万円ほどある中で、70万円ほどがリクエストに当てられている。

永田会長 蔵書の評価はしたことはあるか。

井東次長 新刊図書の購入率としては文学が圧倒的に多くなっている。

永田会長 分布としては読み物に偏っていると言える。それ以外の本がそろっていると、違った読者がやってくる。その構成をどう考えるかという問題である。図書館というのは、住民の人たちが、自分の生活に役立つ情報が得られるところであってほしい。基本的な教養レベルはある程度満足できる状態であってほしい。例えば大学に行けない人たちが図書館で学んで自分自身の人生を作っていける、というのが図書館のイメージとしてある。一方、利用者のニーズにうまく合わせていければいいという形でベストセラーをたくさん買っているという現状がある。先ほどの小田垣委員の図書館サービスの有料化の話をする、アメリカの図書館ではベストセラーは借りるのにお金がかかる。それは蔵書のゆがみを直そうという発想からである。日本ではお金を取るというのは難しく、蔵書のゆがみは図書館が決めなければならない。

小柳委員 利用者にとっては、図書館の予算がいくらあって年間どういう本がどれくらい入ってくるかという計画がわからない状態で利用している部分がある。なので、多分行ってもないだろうという感覚である。しかし、予算があって、こういう計画で本を入れていくと利用者にアピールすることによって、こういう本が来ることが事前にわかれば利用者の窓口が広がる。そこで、有料化については、その上のレベルの話だと思う。予算がないという状況で、お金を払ってでも利用したい人

はまた次のステップに行くといった感じである。

村田館長 図書館の評価の指標として、よく貸出冊数が挙げられるが、図書館を評価する指標はこれだけではないと思っている。図書館をただの無料貸本屋にしないためにも、人気本だけを揃えるような図書館にはしたくないという思いがある。

永田会長 今は本が発売されると知ると図書館に電話がかかってくる。それに逐一応えている図書館もある。それはある意味情けないとも言える。また、本を出す出版社から図書館は大変な不信感がある。特に、電子書籍に関しては、どこも図書館には出していない。だから、諸外国の図書館で電子書籍が進んでも、日本では進まない。図書館は無料貸本屋ではないということを理解してもらわなければならない。

金子委員 以前、アンケートで本が古いという意見があったと思うが、これについてはどう対応しているのか。

村田館長 資料購入費が潤沢にあるわけではない現状では、予算はできるだけ新刊本にかけたいという思いがある。ひきふね図書館は、器はきれいになったけど、本が古いというご意見をいただくことがあるが、あずま図書館と寺島図書館にあった本を持ってきているので、必然的に古い本が多くなる。

井東次長 新刊本は配架するとすぐに借りられていくということも原因である。特に人気本は受入直後から2、3年間返ってこないということもよくある。そこで、新刊を2冊買って、1冊は貸出に回し、1冊は来館者が閲覧できるように図書館に置いておくということも考えられる。

永田会長 ボランティアのイベント等とタイアップして本を入れているということはあるのか。

村田館長 以前パートナーズのイベントで英語の多読講座というのをやったが、そのときに、多読関係の本を増やしている。また、3月29日に、これもひきふね図書館パートナーズの企画であるが、植本祭というイベントを開催予定であるが、そのイベントで区民の方に本を持って来てもらって、パートナーズに本を寄贈してもらい、パートナーズが月に1回利用者に貸し出すということをする予定である。

永田会長 それは図書館が寄贈を受け付けることができないからか。

小田垣委員 そうではなく、まちライブラリーという、本をツールとしてコミュニティを作るという試みがあり、1冊本を持ってきて、自己紹介してもらい、その本にメッセージをつけて寄贈してもらおう。そして次にその本を借りる人もメッセージを書くという試みがある。それをひきふね図書館でもやりましょうということで、やらせていただくということである。

村田館長 先ほど永田会長がおっしゃった、イベントとタイアップした蔵書購入とは若干意を異にするが、英語多読ではイベント関連書籍を新たに購入し、まちライブラリーでは寄贈による蔵書の充実をしている。

永田会長 いずれにしても、何を墨田区立図書館としてコアコレクションにしていく

かというのは大きな問題である。

小野内委員 墨田区の図書館として特色のある、そこでなら必ず調べられるというのがほしい。今は一般的な資料ならどこでも調べることができる。なので、墨田区ならではの資料をまず集める。それが墨田区立図書館としての使命だと思う。郷土文化資料館との住み分けはどうなっているのか。

田中緑図書館長 郷土文化資料館との役割分担については、ちょうど今話をしているところである。どちらに行けばいいかわからないという意見もある。以前は郷土文化資料館がなかったので、緑図書館で色々な資料を集めていたが、資料館ができてからは住み分けをしなければならなくなった。緑図書館では地域資料だけではなく、利用者のニーズに応えられるものを集めたいと思っている。

永田会長 現物資料、ユニーク資料は資料館の方で保管し、図書館では図書、コピー資料を集めるということである。資料がどちらの性質のものかというのを判断するということになろうかと思う。

永田会長 それでは、本日の議事は全て終了した。これで、平成25年度第3回墨田区図書館運営協議会を閉会する。